



特 13
號 1833
卷 6



繪本古圖記第六之卷

目錄

織田勝出張桶狭間

信長進間道討義元

柴田池田斬敵將

太田代官戰勇力

繪本古圖記第六之卷

今川義元討死

織田勢大破今川軍

織田家發向足濃國

長吉郎此送書物

竹中半兵衛破織田勢

長吉郎奇計

繪本古圖記卷之六

信長出張桶狭間

老子曰自教者不長と今川義元桶狭間は平陳を居大軍を以て信長が構て居る七ヶ所の砦を圍せ一息も取れず頻に下を仰ぐ小銃を連ねて砦の裏を突く義元は討死す首をも実儉は使中阿彌若祥寺の砦もさくさくして落城の神はさぐるは追ひ追進するやれは義元もこそこの死と寛くとお笑ひ近習の武士小姓の輩も砦を立せ酒宴をこぼし信長卿は今朝も静に死す合戦の次身を見給ふは惣持津丸根の両城に款強じて防戦計がたけり又おをめて追進するれと又も追ひ来るもさくさく徐々



真頼記初巻六



信長桶狭
に於て張る

のふまか
とゆふま

信長
 間道
 に進ん
 義元
 を討

真言宗
 初編六



真言宗
 初編六

下知し給ふ今度の合戦我々今川も勝敗は丹下の
 砦の防戦あり汝勇と奮て今川の大軍をお断り我々
 して勝利を得じしむ其れ此の海表七ヶ所の砦
 築より一えより今川の大軍を諸方へ引か我々自義元の
 旗中へ切込つ時雌雄を争せん計策之を前知津九根の支
 砦落城し中將若祥寺の城も復たう敵は棄るべし是は
 当城へ向ふ大軍其勢は頗烈しうべし汝死力を尽し討くこ
 う敵と討ひ今川勢を断れお遠し勝勝する義元の時足踏
 んと本陣の勢とてあまの戦ひを救ふべし其後我
 間道より進んで義元の本陣へ切入侍人を討りな
 義元が首と見んや何れ誰さるるぞいん皆そ汝が首と

然し穴賢等雨のあひはあつた勉も遅るるうれ
 給へ勝家踊りよりて大きに悦び是は予むる敵勢い
 むするも二日五日をこらんや何条難きういん若御
 心保んど給ひ義元を討え目も度拜謁仕度よく同
 へやう給へ進め給ひ信長甚悦び給ひ御旗指物とい城
 跡し給ひ信長も安よ此陣の体よりては還兵五百騎山
 の腰なる間道を操りて急ぎ給ふ此陣勝家の仇久間
 方より右の斗俵をやり合ひ敵をせめぎまき我をせん
 かさ嚙をのんで扱より信長並て丹下の城に我生命をか
 りと思ひ給へ若祥寺の小なる海御乃は鐵田大隅守
 信廣を大おきて仇と本の加勢を合せ都合二三百余

騎陳をえて拒さず丹下の軍始々款の城を龍んとその用
意既全一さる後今川勢九根惣津を一息に攻落し
蓋て小田方又築壘する中橋東西の砦若祥寺の砦三ヶ
不を教方の大軍を以て一時に折かきと喚きさるんで攻り
多しえ来不勢の城も多し防戦の御脱は尽て或いさ
遠く死するもあり又孔軍の中は討るも限り小田方
主將水野常力山瀬海老之助荒川更たつを始と多
名氏情と義を多くとれ勇士殺多討死し終に三府斗
の戦ひは又ヶ不の砦落城し多し今川勢益々勇んで勝
み多し丹下又は討破んと潮のおとく攻せし
いささばかりし次ぎたり

紫田池田折新

授六郎勝家剛勇不双の壮士に人皆鬼柴田と称し多
大功の兵あるに丹下両不の勢二万余騎を討て出城中
に信長卿の御旗を多く指と大勢を固るるに援ありて
又其勇み又百余騎を率し唐原右近が二万余人乃
中へ雷のおとく切て入面し多し突立する右近勝家と多
多し陰謀搦て突くる勝家三三寸の太刀を向いしに
稲妻のおとく切て右近の腕を肩されけり切落し
勢ひは棄てり多し又唐原が二万余の軍勢大勢を討てし
うは右近死す教れし我死しと逆多しとんと今川
方富永伯耆守も余人入替て戦へし小田方にも池田



柴田池田
新
斬



惣三郎五百余人柴田に督ておき、大水は如て切結、池田が
 郎等、行相、左の鉄砲をひて、追ぐと、移し、いふ、大將伯耆
 守を馬より、下に討落、と、し、も、勝、勝、う、今川、勢、督、討、の、戦
 い、二人の、大、お、を、討、と、大、き、に、終、り、敵、小、勢、ぞ、一、息、と、討、碎、け、と
 朝比奈、小三郎、三浦、左馬、次、葛山、佐、中、守、飯、尾、を、前、お、熱
 勢、合、て、二、万、余、騎、と、い、と、喚、を、掛、う、り、事、成、と、見、て、仇、久、間、
 右、馬、坂、井、右、近、森、三、左、の、名、古、屋、弥、左、郎、新、多、の、勢、一、千
 余、騎、柴、田、池、田、の、左、右、に、使、一、世、の、大、事、此、時、進、で、敵、と、討
 る、と、も、迎、げ、て、子、孫、に、恥、成、お、と、進、り、や、く、さ、る、へ、く、と、て
 是、よ、飛、命、と、い、う、ら、い、切、も、突、も、看、ん、大、花、と、ら、り、し、多
 戦、い、多、い、と、さ、は、か、り、さ、る、ゆ、も、之、此、時、本、る、に、お、る、織、田、大

隅守に、兵、の、加、勢、二、三、百、余、騎、敵、の、後、を、討、ん、と、守、ま、よ、
 妙、い、と、今、川、勢、二、万、余、騎、最、後、よ、か、ら、て、戦、ふ、と、り
 花、田、大、花、代、血、戦、勇、力
 唐、原、富、永、が、敗、軍、捕、獲、回、り、来、り、味、方、の、戦、い、難、儀、な、る、は
 義、元、へ、所、へ、た、れ、ば、義、元、大、に、勝、り、信、長、小、間、の、分、際、と、い、く
 我、軍、お、所、討、う、る、の、奇、怪、な、る、に、や、急、ぎ、勢、を、出、し、信、長
 を、討、破、と、い、朝、比、奈、佐、中、守、松、井、五、郎、と、二、万、五、千、余、騎、と、い、
 よ、へ、丹、下、の、合、戦、を、助、け、し、い、朝、比、奈、佐、中、守、と、令、ど、て、馳、向、い、大
 隅、守、が、二、万、余、騎、の、中、へ、一、文、字、と、切、入、れ、ば、織、田、勢、を、破
 ら、し、と、仇、と、本、心、道、を、秋、良、文、令、を、持、て、戦、い、し、今、川
 が、新、多、大、軍、を、防、ぎ、か、い、あ、ん、と、い、討、ま、る、と、い、う、る、を、み

大坂代
 血戦勇力



大坂代
 血戦勇力

前田太左代官九根勢津のあきなりと比類なき働きと
和味方難儀の場を脱し馬を殺し来りたるが合戦
大隅守敗北と云ふれ行い少しも難儀と猛虎の
勇を震ひ解る勢と切られ太左代一人は難儀ならし朝比奈
が勢をきき立てて久々なる家へ朝比奈が組下の士は完戸
五郎友辰と云ふ大割の勇士あり太左代がうすひりめ
やと槍抱て向ふより太左代勇き益加り只一突は討た
と相つと喚て突来るを友辰逃して附入太左代がたのち腹
を突通と太左代を来りし世に槍を投て腰をさし
うろ状報をいりて完戸が兜の志向をききうすおろしにせし
太力の完戸は五郎眼くらんで働き得と太左代完戸が槍

りたれ只一突はきき落し首を落して捨りたる今川の大
河原を系をいり太左代がけおてうろを解し
一槍に突殺り勢は来りて殺し一騎馬の武者十七騎討て
落し其の余の者員殺と云ふ一足もききし進で戦
いられ今川の大軍太左代一人は切られ右衛門左衛門に殺れと

今川義元討死

此時桶狭間の義元が本陣先きの合戦難儀あるは
難儀し捨りて難儀の勢を沙丹下の戦を助し
一々餘りの近習小姓のしるおろし信長は同道と
義元の後まわり今川の旗本不勢と云ふくききし
友辰即一番は馬を掛し播にりんで馳り来りおろし

真田記初篇六



今川義元
討死

真田記初篇六



白雨一村路を走り俄に大風砂を捲く本根と穿人馬の
 音よりさきより彼を即挫ふんぞ味方より此風雨を
 務固明神の神風を遣ふくといふも腹都必らず
 毛利新助遠山甚を即中条小八郎林八郎織田造に
 を始めて運兵勝て又百余人義元の旗をへき二五三
 切込今川方不意のよりてみれば大に驚いた狼狽
 人者一人もなく我走に迎ふ義元怒て何者かれは
 来て虎の聲をえやとて重代の太刀松倉郷とへる名
 掘に地方を白眼て走りける中条大音りて小田と總
 助信長自來て見素と岐首級を切りけり教士の勇
 一月は義元固け切込より義元を素太力の勇助信

出はあつてよりなめてこれ指遠へ走りぬる勇を
 て戦ひる腹都小卒を揃合より槍と接て掛合せ義元
 右の太刀を突振り義元太刀を延と小更をか片足打切
 りも進て戦ふを毛利新助後より互と組付短刀を
 て腹腹を差通し終に組殺せしむ此時義元新助が太
 の指に噛付く新助もさうもせし終に首をお落し
 太刀先は突き若より義元此時に十二歳勇名園の太
 且震いしにも名將の姿と云ふりても運脱しぬぬ本
 下軍配は透し出され終に捕獲同の病とぞ消えり
 信長は今川軍
 楓も丹下の戦ひ今を名中とてし不々今川義元の

信長のぶなが大々
 今川の軍と
 破る

頁
 頁
 巳
 卯
 六



眞
 景
 記
 衣
 々
 六

三

肩をち力のまゝ貴き小田信長自本陣を攻破り義
 討えり今も我ふもや又く降参して賜命を蒙
 ると云ふは咄れ今川勢肝を消し響を失ひこへり
 せん漢もやと狼狽強を右往左往は教れ一敗軍と
 になり柴田統久同他田丹羽の勇士得たりやか
 じと切
 信長種を唱へ軍をまゝ凱歌を唱へ清頃の本城へ
 入参いど下の諸士を始り百姓商賈あるまで皆万歳を
 唱へり本城の中は陳を張給ひ討え首共と大羽の雲格
 使ぬまは褒詞を蒙りしは御沙汰ありて皆面目を
 失ふ時よ本下及者即今川方の名も勇士が首十八九

格よ使へ是謹でやろ花田大森代御勘事
 我は討死し心を定め多くは敵はあつて死戦とし
 とも兵一人もなく悉く討え敵は皆今度敗
 軍の御恨ひは伏参し大森代勘事御免
 飲んで患をそとせしと云ふしは信長大森代
 代が罪い小うて此度の雲い大なり
 を定しき給る中のおく給はしとて大森代を
 出され花田線に即年家と名乗せ士卒を
 うらと給はしは大森代派を流し懸て附て退
 信長桶狭間の一戦は今川義元を討たり一國は使

信長様御書



信長
の
長
の
濃
の
向



いふ所の信長とておどろ居る諸國の大名城主郡守
にあらまで致意せしむる者あり一室を抄ひて信長威名
目くみ望み月くみ大いかり義元が子氏共駿府より
とくも暗通のけしきありの吊合戦をも企てくつ
を著し其年にも暮永禄に年暮に月日義元
後治郡を捕義龍死して其子龍具又代りて國政を
執りしははるかに信長此時を失いど敵を討つと
其困乏を憐れ給ふ本下反志を留めて今敵を討
つ時みあはれ今川氏共柔弱なりとて舊代の臣下を
を捕縛し尚國空虛なりとて斗り義元の仇を討つ進退
共に通なりとて將に國を守り民を撫仁恵と爲るは

國家の根本と爲く給ひ兵を食金する時を計り
又征伐しむる運きのありきとてまづ陳を平らぐ
信長自らせんうとて更に用ひ給ひ其勢郡合へ
ふ余勢洲原川を歩渡り徳川へを渡り向ふ家共龍具が
幕下共善提守の城守所中を清重治とてふ者あり
軍を又達し兵書に通じ斗策を帷幕の中より勝
つをふ里の外に宛たりる房孔明にもあはれ
智をたれは又徳川一國の軍師とて其喝へ鄰國みよ
今度信長入のうははるかに合戦のふかき尾
張勢も又吹せ信長とも龍具討んと敵のありと居る
本下反志即作逆志物



まふ
本下後右郎
左の足物と
運ぶ

信長の先陣柴田種元勝家佐久間右衛門信盛三人
 二陣池田越三郎信輝本林三右衛門可成三人余三人三陣信
 長自領の勢を余三人攻めを起し押出の時、後陣
 先多の中、本陣を以て大さなる吹巻の旗をらんを
 又飄り其のまき赤田原の五を以て深き信
 長陣中、味方の内より旗を指者なり誰か
 見く糸しとて軍監柴田守守を令せり此の
 勢にして云はるる本下原なる勢なり其の
 矢押を先より進みとて信長陣の外よりを
 守守を以て其の旗を切捨てし者なきは此の
 に下知して遂に大なる旗を振、後の奥を

み頼もを押し自若として扱へり信長大に怒り
 を述べた大の眼を用とて又罵詈雑言を謹んで
 戦う今日の合戦遙く敵の体を用ひたるふさま、此の謀
 斗よりとて之を軍に召さるる自他味方危急の
 あつた時少く其斗畧あり其の又用ひたる旗に
 と全く旗を以ていひと此合戦終に其斗畧を
 知りし其の時眾は伏して今日只一日迄の相争
 戦ひなりと躍りてやとる信長其不慮に知り
 とも、其斗畧と秀吉にいつたるのをうや
 らんと其後を遂に其の即時の吹巻とる、押
 進する諸士軍中に其の怪はざるなり



竹中
半兵衛
と
磯田
丹次郎
を
破
る



竹中半左衛門信長

去後、信長の先陣、柴田・佐久間・藤田を伴て討て、三子余騎掛、
 後方の先陣、牧野・本・次・たの三子余騎掛、
 て戦ひ、つゝ負て退く。柴田・佐久間・藤田を遣りて追
 討、不に如納村、竹中半左衛門、余騎討て出で戦ひ、
 たり。柴田等、竹中、小勢を侮り、只一擧に討つ。竹
 中、みんぐ、敗北して其勢、方に散れ、柴田・佐久間・藤田
 入せしと心付、引とんとる。不に右虎の園より弓・鉄砲を放
 つ。雨、つゝも繁く、前後より、牧野・本・竹中、三子余騎、村に
 をふさぐ。不に交、餘ととる。柴田・佐久間・藤田、左右
 に敵を包み、大さく驚き、不に突、後、突ても出で、つゝ、

既、み、危く、刀、之、る、不、小、回、の、二、陣、森、池、田、先、陣、圍、と、う、と、
 見、く、三、子、余、人、三、文、字、み、切、て、う、れ、後、勢、は、右、左、分
 ち、く、る、森、池、田、行、と、う、ん、軍、の、さ、ま、怪、し、く、柴
 田、佐、久、間、を、殺、つ、と、け、通、て、先、陣、と、一、つ、み、た、う、れ、後、勢、
 包、で、討、え、ん、と、次、勢、く、み、押、寄、て、細、中、に、入、り、大、れ、お、と、
 け、き、し、果、る、斗、ち、あり

本下辰右郎新奇計

信長、味、方、の、先、陣、二、陣、敵、の、謀、計、は、あ、り、と、見、た、は、い、
 々、れ、に、旗、の、勢、を、み、知、し、て、敵、人、と、い、ひ、時、本、下、辰、右、郎、
 大、お、の、馬、前、に、塞、り、味、方、既、に、敵、の、謀、計、落、入、り、引、退、き、
 後、と、い、ま、さ、し、終、り、と、う、小、相、違、と、覺、き、耳、元、に、鉄、砲、の、



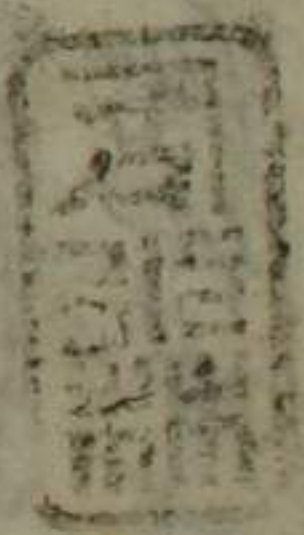
本下後吉郎
新計
仍



きて救子の伏兵二日は張り日根時傳中守先馬と逃
ハ又余りれ鉄指板信長を討とれとあると幸難三
ハ信長が軍勢討つ者救をかり此時義右衛門孫五郎
不知く構へて是の旗にうるれ園より若松けい増
五山の軍より救子の旗旗をひるびき救子の軍勢
紫山の中城押あると人々謀士竹中を始りて日根
時傳村野本のおまふに驚きゆれり又又信長
得るうかりにとめてりて戦ふにぞ敵方大にれ
うくく敵と敗走と信長勇んで退ちよんと下知
孫五郎を義右衛門と敵のお竹中と云流い易者の者み
此某が奇計をみて一旦退くとくもす途より引入る

味方の敗北報いぬ此渡は川を渡り一足も歩く引入
も又馬の口をえりて引入せば信長も実もと勢も熱
急より拂ひ事なりゆ城一歩ひりりる義右衛門とこの
辺りの時武士を救ふかといひお湯の旗を動かす時
五山の軍をつつし稲葉山へ向ふ神をまひりり敵
勢を押しやうせしお兵の針葉あり敵義右衛門と
敗走し竹中が陣陣もゆれりて一歩稲葉山の中城
へと引入るが義右衛門が明察み遠く竹中と云流
一歩の勢より余りてす途より引入るれと敵をや川と
渡りてきえりり力かりて己が居城ゆり信長の義右
をたし今度の奇計味方の軍兵を救ひしと援解

の働き減る神奇妙事と云ふ今より五々三々嘆息を
以て汝が家の指物となつてゐて其感懐し強ひて
を憂ふもあつて思ふ所して退きぬ



繪本左圖記卷之六終

